

## ニュース

### 第 39 回国際養蜂会議

第 39 回国際養蜂会議 Apimondia2005 はアイルランドの首都ダブリンで 8 月 21 日～26 日に開催された。101 か国 3500 人（日本からは 30 名）の参加者は、特に養蜂家向けの、祭事としてのプログラムが充実していたことから楽しんだことだろう。学会としての一面は、反面、今後手を加えて欲しい部分が大きかった。次回 40 回のメルボルン（オーストラリア）大会に続く開催地は、決選投票の末、フランスのモンペリエに決まった。（社）日本養蜂はちみつ協会が書籍部門のコンテストに出品した「蜜源植物」は惜しくも賞を逃した。大会に関する報告・記事を次号に掲載の予定である。

### 第 8 回アジア養蜂研究協会大会

今号 81 ページからの記事にあるように来年 3 月 20～24 日にオーストラリアの西オーストラリア州パースでアジア養蜂研究協会の大会が開催される。アジア圏以外での初の大会で、これまでとは趣向もやや異なる予想される。参加者の募集中で、詳細は上記記事をご覧ください。どうか、アジア養蜂研究協会事務局（ミツバチ科学研究施設内）までお問い合わせを。

### ウクライナ大統領が ミツバチ科学研究施設を訪問

7 月 20 日にウクライナのヴィクトル・ユシチェンコ大統領がミツバチ科学研究施設を訪問された。日本政府の招待による公式な来日で、その日程の合間での訪問であった。大統領は、ウクライナ養蜂協会の副会長を務め、自身で 300 群を飼育する趣味養蜂家でもあり、今回の訪問にあたって、日本のミツバチを見たいという要望があり、外務省からの打診に応える形で、ミツバチ科学研究施設を見学が実現した。ニホンミツバチの蜂場と遺伝子解析実験室を見ていただいた。次号により詳しい訪問記を掲載の予定。



遺伝子解析実験室でミツバチの卵に遺伝子を注入する実験を見学する大統領。この後、実際に顕微鏡をのぞきながら遺伝子の注入を試した。

**編集後記** 今号では、主任交代のあいさつという形で、中身は最近の法律改正、特に来年 5 月からのポジティブリスト制の導入については、勉強させてもらったこともあって解説を試してみた。主任交代は、本文にも書いたように、あくまでも他の人事の影響を受けたものであるが、ミツバチ科学研究施設のメンバーが次々と要職についていくことは、喜ばしいことのようにも見えるし、一方で、ただでさえ少ない戦力が、残されたすべてを支えなければならない状況にもなって、いろいろな仕事が滞りがちになるという問題も残している。この状況は是正しなくてはならないということを抱負として加えるべきであった。状況改善の第一弾は、今号から発送を外部委託したことも知れない。また、主任としての最大のイベントはニュース欄にもあるように、ウクライナの大統領をお迎えしたことであった。大学として現職の国家元首を向けるのは初めてのことで、またミツバチ科学研究施設の施設は、町田市、川崎市、横浜市に分散しており、警備の方々もそれぞれの管轄で配備という形で、いかにもものものしい状況であった（次号に関連記事掲載）。

さて今号の記事としての目玉は、何と云っても、昨年の生き物文化誌学会の例会の特集である。実はこの形にするまでに膨大な時間を必要としたことは誤算であったが、その分、完成してみると、その意義は大きいかなとは思った。今後もこの学会でのミツバチに関する例会の開催が期待されているようで、いずれまた第 2 弾、第 3 弾があるかも知れない。なお、今回の例会に関する記事は、ミツバチ科学別冊として改めて出版し、ミツバチ科学購読会員ではない、生き物文化誌学会の会員の方にも見ていただけるようにして、ミツバチや養蜂を広く人々の理解の範疇に含めてもらえるように働きかけていきたい。

（純）